

ディビジョン1大学部門 帝京大学が2年ぶりの優勝、日体大は2連覇を逃す

JAPAN CUP2026チアリーディング日本選手権大会は、8月27日から4日間、国立代々木競技場第一体育館で開催され、大会最終日にはディビジョン1の決勝が行われた。各部門ともにレベルが高く、中学校部門、高等学校部門、大学部門において、上位チームは大きな落下のない素晴らしい演技が繰り広げられた。

大会は2日間の合計得点（決勝の得点に準決勝の得点50%を加算）で争われ、大学部門は帝京大学（東京都）が2年ぶりに優勝。2連覇を目指した日本体育大学（東京都）は惜しくもあと1歩、及ばなかった。



大学部門でとても印象的な光景があった。

日体大が得点発表を待つ間、大型スクリーンに選手たちの姿が映し出された。笑顔を振りまく選手たち。よく見ると、ひと筋の涙がこぼれ落ちていた。それは嬉しくて流す涙とは少し違って、重圧と緊張から解き放たれた涙でもあり、ほんの少しの後悔も混じっているように見えた。

演技の最終盤。3基のスタントが規則正しくマットの中央に並ぶ。ショルダーストラドル（肩車）から、トップの選手が1回転してミドルに収まる。正面から向かって左側のトップは、演技をしながら感極まった。まだ演技は終わっていなかった。でも、あふれ出そうになる涙を堪えることができずにいた。その姿が感動的だった。



日体大、そして大会の大トリとして登場した帝京大も完成度の高い演技だった。

決勝の得点は両校とも270点を超えている。日体大が274.0、帝京大が277.5。準決勝の得点50%を加算した総合得点は日体大が405.0、帝京大が416.5。史上稀に見る高得点での優勝争いだった。

勝敗を分けたのは、ほんの少しの呼吸のズレ。緊迫感のある2分30秒だったからこそ、解き放たれた瞬間の涙は美しかった。

表彰式が終わってすぐ、日体大の2年生のトップに話を聞いた。すると、感情があふれ出て涙が止まらなくなっていた。

「昨日の夜もすごく練習をしたんです。準決勝の演技をもっと突き詰めようと、みんなで話し合っ決勝を迎えました。すごく練習したのに、こだわっていた演技ができなかった」



前日の準決勝、日体大はタンブリング場面で着地ミスがあった。準優勝に終わった決勝の後、会場の片隅で1人、その選手は泣いていた。「私のせいで優勝を逃してしまった」

いつまでも泣いている選手を見つけ肩を抱いたのは、日体大チアリーダー部を育ててきたヘッドコーチだった。「何を言ってるの？あなたのせいじゃない。また強くなろう。また日本一になろうよ」その光景が美しかった。

日体大のキャプテンは、涙を拭いながら、こう話してくれた。「12月のインカレ（全日本学生選手権）で必ず日本一を取り返します」

今大会のディビジョン1大学部門は、レベルが高かった。優勝を争った2校が総合得点でともに400点超え。「ミス」とまでは言えないような、ほんの少しの「ズレ」が勝敗を分ける結末になった。

1年前、4連覇を目指した帝京大は、決勝の演技で大きなミスが出てリズムを失った。先に演技をした日体大が、フィニッシュでトップが落下するミスがあり、帝京大の優勝は間違いないだ



ろうと思われた矢先に、自ら大学日本一を明け渡していた。

もう2度と同じ悔しさは味わいたくないという思いで、この1年間、帝京大は努力を積み重ねてきた。その思いが結実した。ノーミスの完璧な演技。1つ1つの技、ジャンプ、ダンスに力強さとともに執念を感じるような演技だった。

学生最後のジャパンカップとなる4年生は、こんな話を聞かせてくれた。

「すごく緊張しましたが、この夏にやってきたことが全部出せて良かったです。練習の中から1本にかけるみたいなことをみんなで言い合ってきて、本音でぶつかったりした時もあったので、そういうことが結果に結びついたのかなって思います」

それぞれの部門で、チアリーダーたちの成長を見ることができた大会だった。優勝を逃した選手の涙は次への成長の糧となり、日本一をつかみ取った選手は自信をつかんだはずだ。

未来へつながるJAPAN CUPだった。

写真提供：「デイリースポーツ・プライム」

本サイトの記事、写真の転載はご遠慮ください。無許可の転載・複製は法律により罰せられます。
Unauthorized reproduction or duplication is punishable by law.